

フェリー就航への期待。

2018年6月22日、岩手県宮古市と北海道室蘭市を結ぶ、新たなフェリー航路が就航します。就航を間近に控え、自治体が思い描く期待、そして観光業に携わる企業の取り組みを伺いました。



フェリー就航に至る経緯は?

岩手県初のフェリー航路開設。これによって北海道と岩手県は、より一層広域的な交流や輸送が実現し、新たな観光ルートの可能性も広がります。

平成28年3月の航路開設決定以降、岩手県と宮古市が連携して準備を進めています。宮古港藤原ふ頭の南側に建設されるターミナルビルは鉄骨3階建。東日本大震災津波時を超える高さがあり、津波襲来時に逃げ遅れた場合の一時避難所としての機能を備えた施設です。

岩手県は、10年以上前から港湾整備とその活用促進を長期ビジョンに掲げて取り組んできました。平成25年3月には、岩手県重要港湾利用促進戦略を策定。震災復興の取り組みと併せて、港湾活用の推進に努めてきました。久慈・宮古・釜石・大船渡の重要4港湾の役割に沿って活用目的を掲げ、県中部に位置する宮古港はフェリー航路誘致に向けて動きだした最中、川崎近海汽船(株)からフェリー航路開設の提案を受け、平成28年3月に正式決定となったのでした。宮古が選ばれた背景として、同社における既存の八戸・苫小牧間航路が飽和状態になったことが挙げられます。宮古・室蘭間の乗船時間は10時間。昨今課題となっているトラックドライバーの労働環境改善の観点からも、十分な休息を取れる理想的な

ルートだったようです。ドライバーのニーズに応えた輸送ルートの基軸が、宮古港に誕生することになります。



パンフレットには宮古の各種情報のほか、室蘭の名所・グルメ情報も

復興道路がつなぐ可能性

海路と並行して進むのが、復興道路の整備です。東日本大震災以降、三陸沿岸道路や沿岸と内陸を結ぶ復興支援助道整備が急ピッチで進んでおり、全線開通により宮古・盛岡間は片道1時間15分、宮古・仙台間は片道約3時間で結ばれます。宮古港から県央部、県外の主要都市へのアクセス向上による波及効果について、岩手県県土整備部港湾課の照井巧総括課長は期待の言葉を語ります。

「復興道路は高速料金がかからないため、陸路のコスト削減になりま

す。また、三陸沿岸は冬の積雪量が少ないので、天候不順による通行止めはほとんどありません。万が一、自然災害や事故による交通規制があっても岩手県中央を通るルートもあるため、物流面で低リスク、低コスト化を図ることが出来ます。宮古・室蘭間と八戸・苫小牧間の海路を相互補完的に活用することで、県内輸送経路の選択肢は多種多様に広がります。地元企業の皆さんが、フェリー就航のメリットを長期的視野で捉えてうまくビジネスに活用してくれることを期待しています」。



フェリー開設を長期的価値と捉えて活用促進に取り組んで欲しいと語る、県県土整備部港湾課・照井総括課長

沿岸と内陸をつなぐ旅行プラン！

フェリー航路開設は、物流ルートを活用による経済効果を大きく期待するものですが、観光面では新たなエリアからの交流人口増加が予想されます。宮古・室蘭便は定員が600名。ドライバーと観光客との乗船エリアを分けてあり、各エリアでゆっくりと過ごすことができるシルバークラインを導入しています。

「宮古港のフェリー発着はともに早朝。観光に利用しにくいという声もありますが、岩手に定期便が誕生することの価値は大きく、ぜひ船上の旅を楽しんでほしいものです。宮古は前泊者も増える可能性があり、すし、室蘭からの到着に合わせて市内の旅館や飲食店では朝食サービスも考えているようです。岩手県としても、宮古を起点に県央や県南の平泉等への誘客を全体でPRしていきたいですね」と照井総括課長は話します。

一方、岩手初のフェリー就航を受け、地元企業はどんな戦略を進めているのでしょうか。その最前線にあるのが地元の旅行業者。宮古市に本社を構えるリアス観光(株)の大久保誠さんに話を伺いました。

「新しい移動手段が増えるという意味で、もちろんチャンスだと思っています。宮古に入ってくる人々をその先に導くのは地元の会社。復興道路開通によって、盛岡を始め県内全域への移動時間も短縮されます。そうしたメリットは企業がどんどん発信していく必要がありますね。決定した内容を生かし、どんなサービスができるか。ターミナルとなる宮古はどうしても周辺のサービス提供が中心。外側からも積極的提案をすることで、新しい動きも生まれるのではないかと思います」。

同社では7月にフェリーを活用した北海道旅行プランを企画していま



リアス観光(株)の大久保さんは「移動手段の幅が広がること」に期待を寄せます

す。また、北海道の中学生震災学習ツアーの予約も入っており、宮古を起点に平泉へ足を延ばす予定だそうです。

「往復すべてを宮古・室蘭ルートで組むだけでなく、八戸・苫小牧ルートも生かしながら考えると柔軟に対応ができる」と大久保さん。陸路や空路などを必要に応じて組み入れると幅広いエリアに人を運ぶことができ、波及効果も広がりそうです。同社が予定する7月のツアーも宮古を起点に盛岡を経由し、八戸から北海道に渡って富良野や美瑛を満喫し、室蘭から宮古へ戻ってくる3泊4日のツアー。「新たな交通手段」の組み込み方が手腕の見せ所です。

毎朝、宮古にフェリーが入港することで物流がどう変化するのか、観光客にどんな流れが起るのか。その効果を実感するのはまだ先のことです。しかし、岩手県全体で意識的にフェリーの利用促進を進めることで地域経済への効果も膨らんでいきます。

川崎近海汽船(株)の事業所ができることで、リネンのクリーニング、土産品や食材納入などの取引も生まれます。開設当初は1日1便ですが、利用率向上と共に便数が増えれば様々な需要が生まれ、宮古周辺に事業拠点を構える事業所も出てくるはず。「震災復興が進む沿岸において、なりたいの再生につながる大きな一歩にしたいものです」と話す照井総括課長。フェリー開設を機に生まれる人とモノの新しい流れは、地元企業全体で育てていくべき大きなポテンシャルを秘めています。



就航まで1ヶ月を切り、岩手県によるキャラバン隊が当所を訪問。各所でPR活動を行っています